

## 「躍動する授業づくり」

江戸川区立葛西小学校 2年担任 岩井 千晶

### 1. はじめに ～「躍動する」とは～

「躍動する」というとき、私が思い浮かべるのは、子どもたちの次のような姿です。

- ・「発表したい」と手がたくさん挙がっている
- ・友達の発表を真剣に聞き、反応したり、一気に教室がにぎやかになったりする
- ・思わず近くの友達と話し合いを始める
- ・次々とアイデアが思い浮かぶ中で、「でもさ…」と反対の意見が出てくる
- ・静まり返った教室で黙々とノートに自分の考えを書き続ける
- ・ぶつぶつと自問自答しながら手を動かす
- ・一点を見つめて考え込んでいる
- ・初めて自分の考えを書く、初めて大縄跳びで連続で入ってみる、など自分のハードルを飛び越える

つまり、子どもたちの頭の中や、心の中、体の中で何かが活発に動いているとき、また、これから動こうとしているときの姿を「躍動する」だと考えています。これは、クラス全体が躍動する様子になることもあれば、今この児童は躍動していると、子どもたちそれぞれのタイミングで躍動が起きている瞬間もあります。子どもたちのこのような姿が見られたときには、自分の心の熱量も一気に高まるように感じます。

### 2. 子どもたちが「躍動する」ために

子どもたちが「躍動する」授業をつくるためには、日頃の積み重ねからつくられる基盤と、その時間の学習活動に合ったしかけの両方が必要です。

まず、日頃の積み重ねからつくられる基盤として、「子どもたちが反応すること」を意識しています。例えば、友達が黒板に表しながら発表しているとき、クラスの子どもたちは「いいね、いいね!そこまで合ってる!」「そうそう、あと少し!」「できた!」とロク々に言います。これは、友達の思考と一緒に体験し、自分の考えと比べている、つまり「動いている」からこそ、出てくるものなのではないかと思えます。また、誰か一人が発言すると、それに呼応するようにして、良い考えが出てくることもあります。道徳の学習で、「“あとすこし。あとすこし。”は、頑張る合言葉だと思います。」と発言した子に対し、「そうそう、心の鍵だね。」とつぶやいた子がいました。こうしたときには、すかさずその発言を取り上げます。こうした反応を大切にすることは授業規律とのバランスのととり方が難しいと感じることもありますが、子どもたちの中で心がしっかりと動く状態を絶やさないようにすることが、特に担任している低学年の子どもたちには必要だと考えています。

毎時間の学習活動の中では、「子どもたちが『できそうだ』と思える段階まで一緒に進むこと」を意識しています。国語で一枚の写真からお話をつくるという学習活動で、教科書の例を用いて説明しても、子どもたちの様子があまり良くないことがありました。「できそうだなと思う人、難しいなと思っている人?」と聞くと、ほとんどの児童が「難しい」の方に手を挙げていました。そこで、「みんなで練習してみよう!」と授業の流れを変更し、クラス全体で一つのお話をつかっていきました。すると、途中で「先生、もう自分で書いてもいいですか?」「早く書きたいです!」と、目を輝かせながら子どもたちが言い始めました。そこからは、鉛筆を動かす手が止まらない勢いで、書き進める姿が見られました。このように、一部の児童だけが躍動できるけれど、そうでない児童は手を止めるしかない状況ができるだけ起こらないように、授業をつくるようにしています。

### 3. 実際の学習から見られた「躍動する」姿

国語の物語文「わにのおじいさんのたからもの(教育出版)」の学習を取り上げ、「躍動する授業」を目指して、どのように授業づくりをしたのか振り返ります。

これまでの国語の説明文や物語文も、子どもの初発の感想から疑問を出し、その答えを見つけながら読み深めてきました。しかし、一つ一つの疑問を繋げて学習することはできていませんでした。PDCA サイクルでいうと、P→Dのみになってしまっていたと思います。

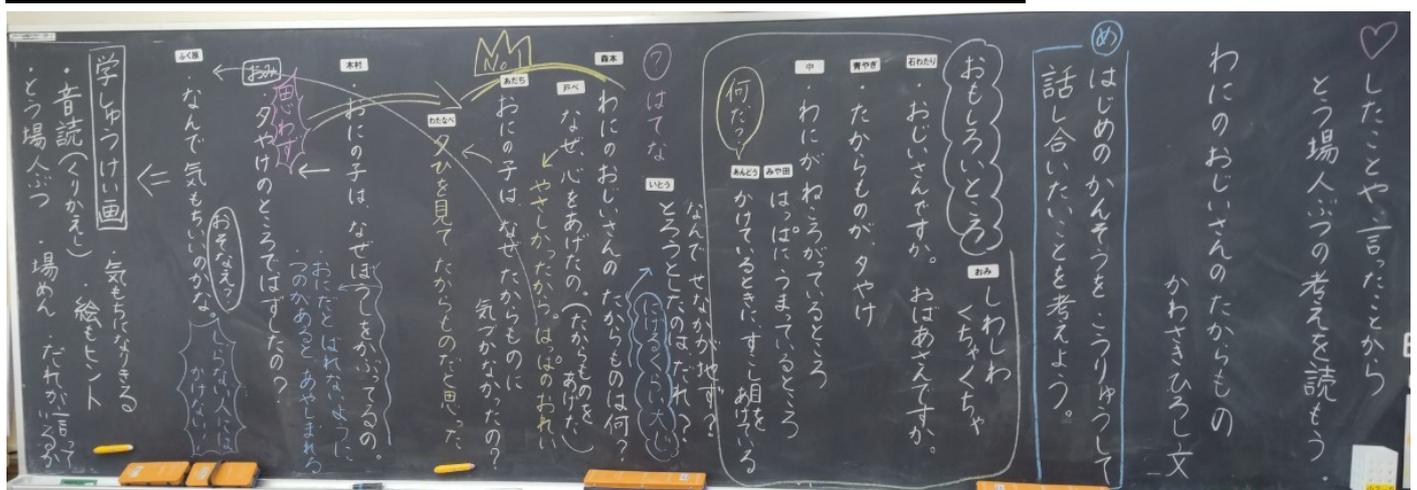
今回の「わにのおじいさんのたからもの」は、初発の感想から疑問を出し(P)、答えを見つけていく(D)という大きな流れだけではなく、毎時間の子どもたちの振り返りを生かして小さなPDCA サイクルを回しながら学習を繋げていく形ができたことが、これまでとの違いだと考えています。

#### <単元計画>

◎したことや、話したことから、登場人物の考えを読もう。

学習活動		
第1時	範読を聞き、初発の感想を書く。	
第2時	初発の感想を交流し、学習計画を立てる。	
第3時	挿絵を並び替え、どんなお話か確認する。	
第4時	登場人物の気持ちや考えを想像する。「おにの子は、どうしてぼうしをかぶっているのだろう。」	
第5時	↓	「わにのおじいさんは、どうしておにの子にたからもの場所を教えたのだろう。」
第6時		「おにの子は、夕やけのところで、どうしてぼうしをはずしたのだろう。」
第7時		「おにの子は、どうして夕やけをたからものだと思ったのだろう。」
第8時	おにの子に、足元にたからものがうまっていることを教えるか、教えないかを考え、話し合う。 終わりの感想を書く。	

#### 第1時(9月22日)・第2時(9月28日) はじめの感想を交流し、学習計画を立てる



第1時で範読を聞いて感想を書き、第2時で交流をしました。第1時と第2時の間に、一人ひとりの感想の良いところに印を入れて、自分の考えに自信が持てない子も発表しやすくなるようにしました。

特に、子どもたちの「はてな」について話し合う時間を多くとります。「はてな」を発表すると、それに対して「答え」になりそうな読みを発表する児童がいます。また、ぼうしをかぶる、はずす、など細かい点にはまだ気づいていない児童もいます。そこで、「どこに書いてある?」など教科書の本文に立ち返って確かめながら、他の子どもたちにも「はてな」

が広がるようにしていきました。

その後、「はてな」をクリアするための、学習計画を立てました。子どもたちは、「いつも通りに読めばいいんだよ。」  
「繰り返しね!」と、答えます。「いつも通りって?」と問い返ししながら、具体的な活動を挙げていきました。学習計画を立てる活動は、1年生から行ってきているので、基本的な活動はすぐに出てきます。今回は何より、「繰り返し読む」ことが最初の発言として出てきたことがうれしいと思いました。一読では分からないことも、何度も読んでいくうちに分かる、というのが国語の文章を学習していく上でとても大切なことだからです。

学習計画	・登場人物を確認する。(授業内で、時と場所の確認も加えました。)
	・場面を分ける。
	・だれがどのセリフを言っているのか確認する。
	・「はてな」を考えていく。
	考えるために、 ・音読をする。(繰り返し)   ・登場人物の気持ちになりきる   ・絵もヒントにする

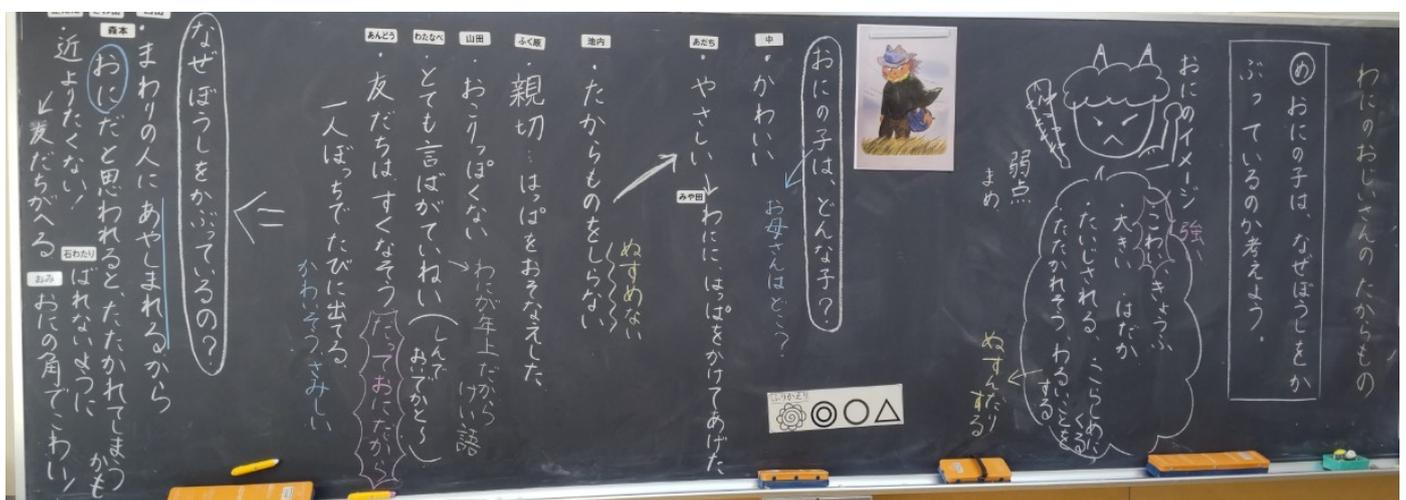
### 第3時 (9月30日) 物語全体のながれをつかむ

挿絵をもとに、物語のあらすじを確認しました。最後に、前回の「はてな」にもう一度触れ、精査していく活動を入れました。第2時で出された「はてな」の中には、物語の設定に関わるものなど、読み取りには適切ではないものもあるからです。今までは私の方で「これは難しいね。」と言いながら精査してきましたが、今回は子どもたちと話し合ってみました。まだ全員が区別することはできていないと思いますが、焦点を絞ったことでより見通しをもちやすくなったと思います。

話し合っていく「はてな」
・おにの子は、どうしてぼうしをかぶっているのだろう。
・わにのおじいさんは、どうしてたからものをあげた(たからもの場所を教えた)のだろう。
・おにの子は、どうしてタヤけのところでぼうしをはずしたのだろう。
・おにの子は、どうしてたからものに気づかなかった(タヤけをたからものだと思った)のだろう。

### 第4時 (10月4日) 「おにの子は、どうしてぼうしをかぶっているのだろう」

第4時から、詳しい読み取りに入ります。ここからは、子どもたちが考えた「はてな」と、毎時間の学習の振り返りを生かしながら、学習を進めていきました。



いきなり、この問いについて考えても答えがわかる子もいますが、多くの子どもたちがしっかりと考えをもてるように

するために、まずは一般的な鬼のイメージと、おにの子の人物像について話し合いました。だんだんと、鬼とおにの子

～第4時の振り返りから～

「おにの子は、いいおになのに、みんなにつのを見られただけでわるいおにと見られるのがかわいそう。」

「つぎのはてなで、ぼうしをはずしたけど、なぜいつもと同じように気をつけないのか考えたいです。」

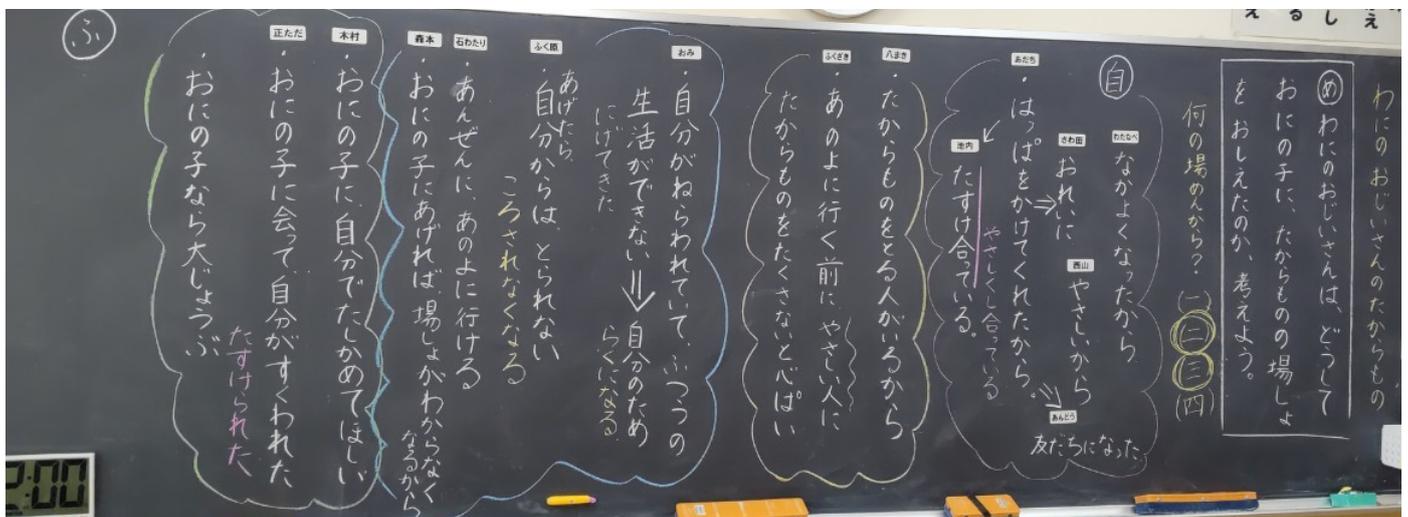
→ T: つのを隠すためにぼうしをかぶっていたのに、タヤけのところでははずしたんだよね。どうしてだろうね。  
ますます不思議だね。(第5時の読み取りに繋げる)

「おにの子とわにのおじいさんは、どっちもやさしいことに気付きました。」

→ T: おにの子はやさしいということが分かったよね。わにのおじいさんは、やさしいのかな。今日は、わにのおじいさんについて考えるから、たしかめてみようね。(第4時に繋げる)

の違いに気づき、そこから問いの答えを見つけていったように思います。

第5時 (10月5日) 「わにのおじいさんは、どうしておにの子にたからものの場所をおしえたのだろう。」



この問いについては、様々な面から答えが出されました。答えを探す中から出てきた、たからものに対するわにの

～第5時の振り返りから～

「このお話でいろんなことが話し合えるんだなと思いました。」

→ T: 色々な気持ちが混ざっているんだね。これだけ話し合えるのは、みんながしっかり物語を読めるようになってからだよ。

「おにの子がもしいなかったら、たからものがぬすまれて、わにのおじいさんが心ぱいになったかもしれないけど、おにの子がきてくれたからあん心したと思います。」

「わにのおじいさんもおにの子も、二人ともおたがいあい手の気持ちとわたり合える心がかがやいているんだなとわかりました。」

「みんなの話をきいて、Iさんのたすけあっているとか、たしかにあらためて見て、やさしくあっているんだなとそのとおりだなあと思いました。」

→ T: Sさんがおにの子も、わにのおじいさんもやさしいって書いていたけれど、みんなで考えてみてやっぱり二人ともやさしいと分かったね。

「なんでわにのおじいさんは、おにの子にうまっていたたからを言わなかったのかな。」

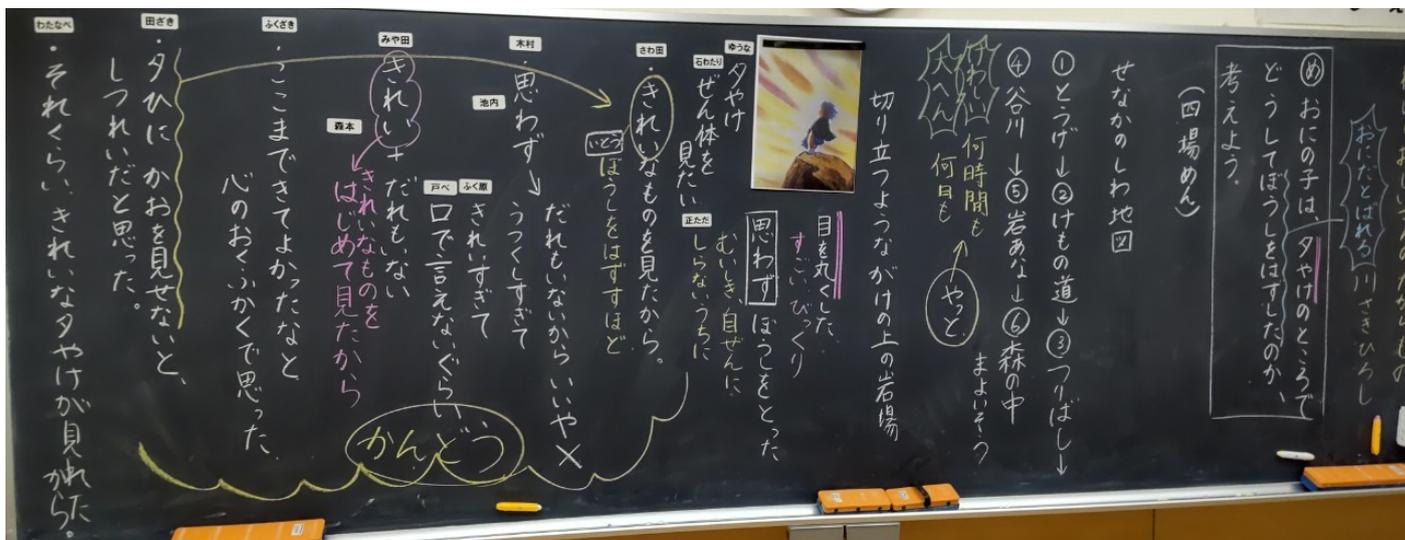
→ T: たしかにそうだね。もし、わにのおじいさんが「たからものはダイヤモンドだよ。」と言っていたら、おにの子は、夕焼けがたからものだとは思わないで、すぐに地面を掘ったかもしれないよね。なんで、中身を言わなかったんだろうね。(第6時に繋げる)

おじいさんの思いや、おにの子とわにのおじいさんとの関係は、次時以降の読み取りに生かされていきます。

### 第6時（10月7日）「おにの子は、タヤけのところで、どうしてぼうしをはずしたのだろう。」

この単元の最後に、「おにの子に、わにのおじいさんのたからものは足元にあることを教えるか、教えないか。」という問いかけを子どもたちにしようと考えていました。第2時に、「なぜたからものに気づかなかったの？」という疑問が出た時に、子どもたちに聞いてみたところ、「教えてあげる」という声がかほとんどでした。子どもたちの感覚としては、当たり前のように「教えない」気持ちになると思います。どちらが正解というわけではないのですが、「自分で見つけたタヤけをたからものだと思っているのだから、その気持ちを大切にしてみよう。」というもう一つの面も、子どもたちが気付けるようにしていきたいと思いました。それほど夕焼けに感動しているおにの子の気持ちに近づいてこそ、この物語文の良さも味わえると思ったからです。

そこで、第6時では、本文をもとに岩場までの道のりの大変さに触れた上で、「はてな」を考えました。



～第6時の振り返りから～

「Hさんがかんどうって言うてくれたから、みんながわかって、Hさんナイスだと思いました。」

「ただ自分だけの考えだったら、ボスにたどりつなかいと思っていたけど、みんなのはっぴょうを聞いたら自分の書いたことがしんかして、ボスとたたかえるようになった。」

「きょうやった学しゅうをボスのヒントにしてみたいです。」

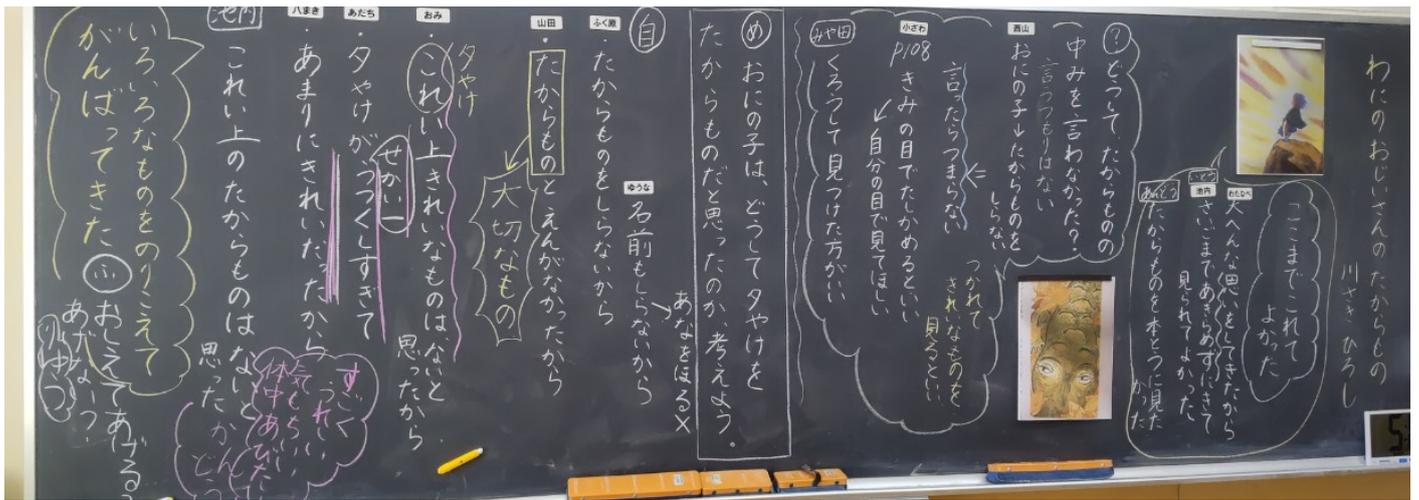
→ T: 昨日の学習で、おにの子が思わずぼうしをはずしてしまうほど、感動したということが分かったね。では、さっそく昨日の学習もヒントにして、ボス（最後の「はてな」）を考えてみましょう。

### 第7時（10月8日）「おにの子は、どうしてタヤけをたからものだと思ったのだろう。」

「はてな」を考える前に、前時のぼうしを外した理由の中で出た「ここまで来れてよかったと、心の奥深くで思った」という発言をもう少し、掘り下げることになりました。そうすることで、タヤけをたからものだと思ったおにの子の気持ちにより近づけると考えたからです。また、児童の振り返りから出てきた「どうして、わにのおじいさんは、たからものの中身を言わなかったのか」という疑問も取り上げ、「自分で見つけるたからものの」の意味にも触れられるようにしました。

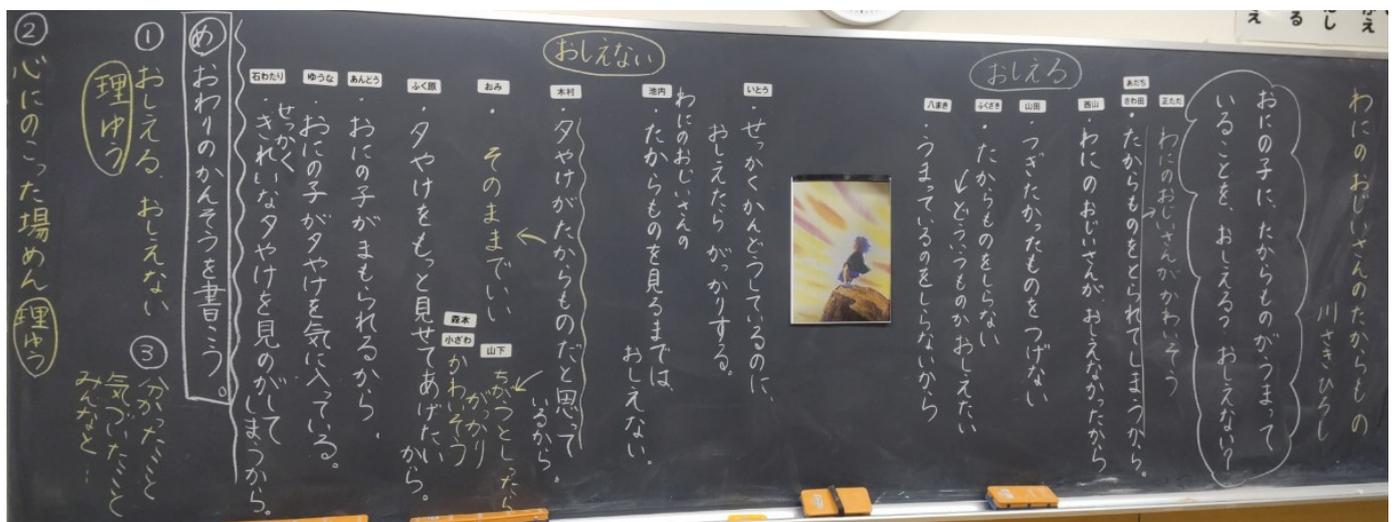
「はてな」について話し合ったあとに、「このときのおにの子の気持ちはどう?」と聞くと、「すごくうれしい、気持ちがいい、感動している、体中夕焼けをあびたい。」などと、気持ちが高揚しているおにの子の様子を捉えた言葉が出てき

ました。そこで、改めて「そう思っているおにの子に、わにのおじさんのたからものは足元にあることを教える?教えない?」と尋ねて、考えを書いてもらいました。



第8時（10月12日）「おにの子にたからものがうまっていることをおしえる?おしえない?」 終わりの感想を書く

ここまでの読み取りの中で、子どもたちの考えも変化があり、第7時の終わりにノートに考えを書いてもらった段階では、3分の2近くの子どもたちが「教えない」を選んでいました。自分のねらいの中にあつた、読み取りを深める中でもう一つの世界に子どもたちが気付く、という味わい方ができたことが良かったです。また、どちらを選択しても、ここまでの学習で読み取ったことを生かしながら理由を書けた子が多かったことも良いと思いました。



4.この単元を振り返って

1年生の頃から、物語文の学習が大好きな子どもたちで、自分が登場人物になりきってセリフを楽しく考えることを通して、登場人物の気持ち想像してきました。でも、今回はおにの子に近づきながらも、今までとは少し距離をとって、少し広い視野で、想像を広げつつ、文章に基づくという読み方ができたと思います。

子どもたちの振り返りをたくさん取り上げたことで、書く振り返りの質が高まったと感じています。自分なりの読みの深まりや、気づき、みんなで話し合ったからこそ浮かんださならなる疑問を振り返りに書くようになったことには、大きな意味を感じました。また、振り返りを生かしたことで、クラス全体では、今日「はてな」を考えたからこそ、読みが深まって、新たな疑問が出てくるというサイクルや、読み取りを生かすと、はじめに考えていた疑問がより気になる疑問になって繋がっていくサイクル、友達の読みを自分の中でもう一度捉え直し、自分の読みに生かしていくサイクルなど、より

複雑な形でスパイラルを形成しながら学習ができたと感じました。一人の疑問や気づきを広げて、読み取りに生かしていくことや学習計画をもとにしっかりと見通しがもてていたことなどが要因だと思います。

さらに、いつもは考えを書けなかった子がノートいっぱい考えを書く、なかなか発表できなかった子が自分から手を挙げる、友達を推薦して考えを発表するなど、一人ひとりにも変化が見られました。

一方で、ファンタジーの世界に浸りすぎたり、逆に浸ることができなかつたりする児童もいることは課題です。また、自分で考えが書けず、友達の考えを手がかりにすることも難しい児童もいるので、スモールステップで声をかける必要があると感じます。

## 5. 最後に

この2年間低学年を担当していて、今現在の「躍動」だけでなく、この子どもたちが上の学年になったときに、「躍動する」力を育てられているかどうかを考えることが増えました。学習における「躍動」では、日頃の学級経営だけではなく、しっかりと知識や技能を身に付けることや、考えたことを言葉や文章で表現できる力も不可欠です。さらに、「学習が楽しい」「学校でみんなで学習すれば分かるようになる」という前向きな気持ちを育てていくことも大切だと考えています。授業の中で、子どもたちのどのような姿を目指していくのか自問自答しながら、よりよい授業に向けて改善を続けていきたいです。